博士論文要旨

氏名　　岸川 加奈子

学位の種類　　博士（人間科学）

学位記番号　　甲第19号

学位授与年月日　　平成28年3月17日

学位授与の条件　　神戸女学院大学学位規程第5条1項の規定による

学位論文題目　　風景構成法とバウムテストの比較

～時代的変化による検討と「木」表現の比較～

論文の要旨

心理臨床の場ではクライエント理解の一助としてアセスメントが行われる。そのアセスメント手段でもある心理テストの中で、投影法に属する描画法は、一般的にパーソナリティや無意識の深い層を捉えやすいとされている。また、描画はアセスメントとしてだけでなく、対象者が絵を描くことを通して洞察を得ることにより、心理的な問題の解決やパーソナリティの変容といった治療効果が期待されるような、心理療法としての側面もある。特に、アセスメントとして描画が用いられる際には、課題画が選択されることが多く、またいくつもの技法が存在しているが、これらの描画法が淘汰されることなく、臨床の場で使われ続けているのは、それぞれの描画法に特性があるからだと考えられる。しかし、描画法同士を比較した研究や、それぞれの特性・どのような側面を見出すのに適した技法であるかを検討した研究はまだ少ない。本研究においては、風景構成法（以下、LMT）・バウムテストの二技法を、時代的な変化と両技法に登場する「木」の比較により、特性を見出そうとするものである。

研究１・２では、1987年・2000年代の異なった時代の５歳児を対象にして施行したLMT・バウムテストを比較し、時代的な変化について検討した。異なった時代の5歳児に対して施行した描画を比較することで、時代的な変化が捉えられると同時に、個々の技法の特徴も見出されることが期待できる。被験者は5歳児とし、1987年・2002年・2004年に集団法で実施した。

LMTを用いた研究１では、LMTの構成度により分類し、統計的処理を行った結果、1987年の方が構成度の高い絵を描いていた事が証明された。自我とLMTの構成との関連を統合失調症の描画を例に挙げながら述べた上で、構成により自我発達の度合いを見ることが可能なのではと考察し、時代による差が自我発達によるものである可能性を示した。

バウムテストを用いた研究２では、バウムテストの形態、特に幹・枝表現で分類し、統計的処理を行った結果、幹表現においては差が見られたが、枝表現においては有意な差は認められなかった。また、2000年代の5歳児において、枝を描かず樹冠を描く子どもの増加傾向が認められ、近年の5歳児の特徴である可能性が示唆された。

研究１・２は同じ被験者群において行った比較研究であったにも関わらず、用いられた描画法により、差の表出の有無や新たな現象の表出があり、また、描画法それぞれに、反映されやすい個人の側面や特性がある可能性が窺われたことから、両技法に登場する「木」の比較を始点に、技法の特性を見出すことを目的とする、研究３・展望研究を行った。被験者は4歳児・5歳児・小学2年生・中学生・高校生・大学生とし、2002年7月～2010年4月に集団法で実施した。いずれもLMT→バウムテストの順で施行した。

研究３においては、バウムテストとLMTにおける「木」を比較するために、内容分析に対応する木の形態による分類、全体的評価・形式分析に対応する印象による分類を行った。印象に関しては、“描画を一見した際に同一人物が描いていると判別可能か否か”で判断した。これらの結果を、統計的処理した結果、形態においては、いずれの年代も異なった木を描くが、年少児・中学生・大学生では、同じ木を描く者が他の年代に比べて増加する傾向が認められた。印象においては大学生のみ統計的に判別可・不可に差がなく、他の年代は有意差があった。また、年少児・中学生・大学生は同一人物が描いていると判別可に分類される傾向が窺えた。どの年齢群においてもバウムテストとLMTでは異なる形態の木を描かれることが多いことから、バウムテスト解釈を、そのままLMTの「木」に当てはめることは現実的ではないが、大学生においては、同じ木を描く傾向が高まり、同一人物が描いているとの判別も半数が可能になることから、大学生のLMTにおける木に関しては、バウムテストの解釈を参考に出来る可能性が示唆された。また、LMTの木は、ある程度の構成がなされた後に教示され、登場することから「既にある関係性の中に描かれる木」と解釈し、個が現れやすいバウムテストに比して、対人関係的な側面が現れやすい可能性があると考察した。

展望研究では、研究３の分類結果に、川表現に特に着目したLMT構成度の視点を組み入れ、検討を試みた。形態が同じに分類される者は、その年代で“構成度のより高い者に多い”ことから、自我発達度が高くなるにつれて、個人内での木のイメージが固定される可能性が示唆された。印象分類においても、同様の傾向が認められたが、中学生・高校生に関しては、学年により傾向がまちまちになり、大学生において、構成度が高くなるほど判別可の割合が増えるとの結果が得られた。

今後は、分類に際して用いた構成度分類表の精度を上げたうえで、さらなる考察を深めることが求められる。また、順序効果への配慮や個別実施による検討の必要性も指摘した。